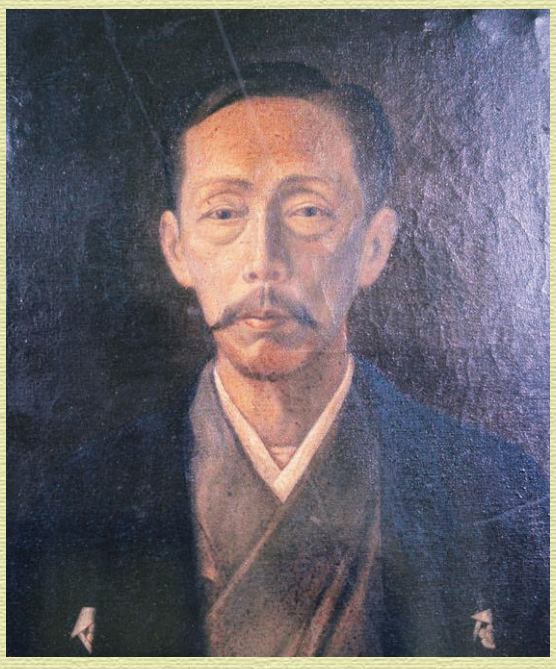
じゅうううんえん

住雲園と久須美家の人々

曽我物語・勘定奉行・越後鉄道

住雲園（弥彦山を借景とする旧久須美邸庭園）



久須美秀三郎

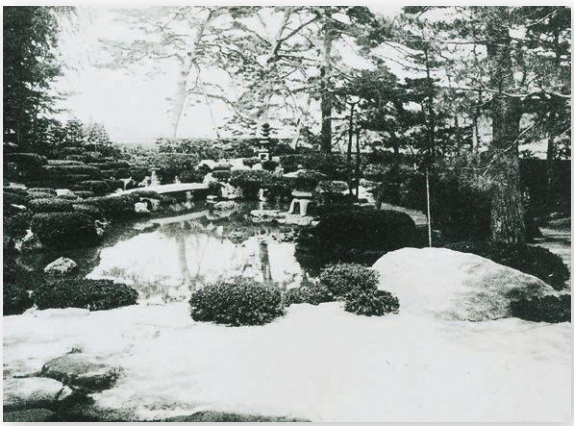
久須美東馬

住雲園（じゅううんえん）と久須美家の人々・池田育英会

遠く鎌倉時代に越後へ逃れてきた久須美家が小島谷（旧三島郡和島村）の現在地に居を構えたのは、17世紀半ば14世久須美六郎左衛門政幸の代からである。以来28世久須美東馬まで継嗣され、昭和13年（1938）に大阪市の池田直吉氏に譲渡された。後に池田氏は久須美邸を住居とする一方仙台市にて（財）池田育英会を発足させ、数多の英才を世に送り出した。池田氏は昭和47年（1972）に久須美家より譲受した家屋敷一切を、生まれ故郷長岡市に寄贈した。長岡市は「市民いこいの家」として管理してきたが、平成３年（1991）、和島村に移譲した。平成17年（2005）、長岡市との合併前に（財）池田育英会は解散し、所有財産のうち現金等の流動資産は長岡市米百俵財団に、山林は和島村に寄贈された。平成18年（2006）、和島村所有の家屋敷等は長岡市と和島村の合併により再び長岡市の管理下におかれることとなった。

Ⅰ．「住雲園」の由来

久須美家が小島谷の現在地に居を移したのは、14世久須美六郎左衛門政幸（明暦２年４月卒）の代である。その後、江戸詰から帰郷した16世久須美六郎左衛門政信が心労を癒すため享保２年（1717）に造園を手掛けたと伝えられている。



庭園は北越の地における名園の一つとされ、多くの文人墨客が訪れた。庭園池畔の巨岩奇石は各地の銘石を集め、石灯籠に刻された菊の紋様は由緒ある来歴を秘し、池に跨る石橋・小高き丘と数奇を凝らした庭園の美しさは、庭園内の杉聴雨の碑文より往時を偲ぶことができる。なお、「住雲園」の名は23世久須美太宰逸翁の代、久須美家に逗留した漢詩人大窪詩仏の命名による。

表紙の肖像画について

平成17年、新潟市の割烹旅館「小甚」が閉店しました。その折、新潟市在住の久須美さんが「小甚」を訪ねたところ、久須美秀三郎・東馬父子の肖像画があることに話が及び、さらに旧和島村での保管について打診を受けることとなりました。是非にとお願いをし、和島支所で保存保管を図ることとしたものです。

往時、新潟市に出かけると、久須美父子は「小甚」さんを常宿としていました。越後鉄道㈱の最初の役員会も同館で開かれました。秀三郎没後80年、東馬没後60年もの時が経過しているのに、なお丁寧に保管されていた肖像画を見れば、父子と「小甚」さんとの関わりがどのようなものであったかを想像できるかと思います。

Ⅱ．名勝庭園の指定

昭和９年(1934)に行われた文部省の調査により、「住雲園」は名勝庭園の指定を受けた。その調査について、昭和９年10月１日付け「中越新報」(出雲崎町教育委員会所蔵)は以下の記事を伝えている。

「史跡、名勝、天然記念物調査委員一行は文部省の照会に基づき、名勝庭園の資格を調査中のところ、自然美と由緒に重点を置き、本郡島田村住雲園、北蒲原郡継志園の二庭園と決し、県社寺兵事課を通じて報告した。」

「住雲園は享保年間の築造で、庭園には丘陵あり、治水あり、瀑布あり、布石あり、老松おうて雲をしのぎ、脩竹干竿常に風を含んで声を生ず。樹幹千歳、こけ青く、その間つつじを配植し、開花時には満庭花をもって埋まる。梅桜、かえでの配景あり、近景賞すべく、遠景また結構。(略)なお、住雲園は県下に比類なき名園で後世に遺すに足るべきに、(略)文部省より名勝庭園の指定を受くるに於てはここに往年の盛名を復興するに至るべし。」

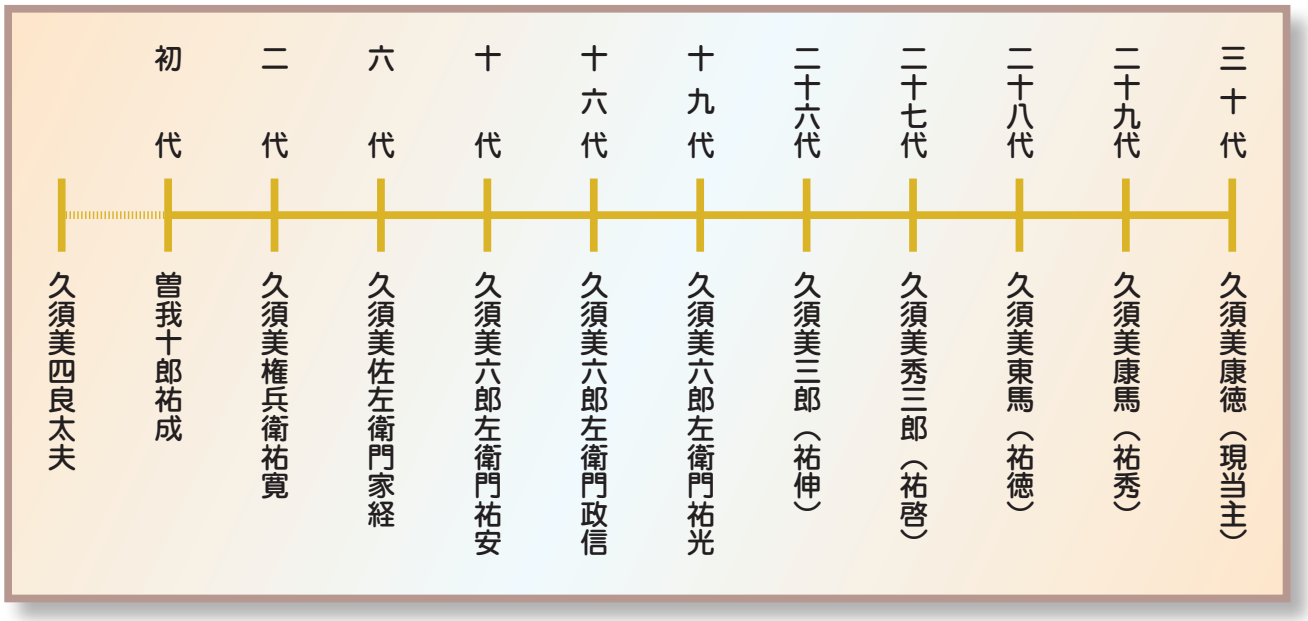
大正時代の住雲園

Ⅲ．久須美家の祖と系譜

久須美家は曽我十郎祐成(弟五郎と共に父の敵工藤祐経を討つという『曽我物語』の主人公)を初代とする。

仇討ちに先立ち、十郎は越後国上山国上寺にいる弟禅師坊をたよる様、妻宮内氏に申しわたし、「君萬歳」の太刀を渡す。仇討を果たすも十郎はその場で斬られ、十郎の妻は身重の躰をおして逃れる道中、上野国白井郡(現渋川市)で建久４年(1193)９月３日男子を生む。曽我の姓を名のるのを憚り、故郷の地名に因み、久須美権兵衛祐寛と名のる。祐寛13歳の時、越後逆谷村曼荼羅寺(寛益寺の奥の院)の寺麓に隠れ住む。その後、久須美家は日野浦村そして小島谷村上村鹿島宮近くに居を移し、現在地に至った。

系図の概要は以下の通り。



Ⅳ．有栖川宮家と久須美家

高田城主稲葉丹後守は元禄10年（1697）、弟稲葉左衛門通周に小島谷の地一千石を分知した。通周は寄合いに列し、将軍綱吉に拝謁し旗本となる。久須美家は旗本稲葉家の采地一千石の代官として仕えることとなった。

久須美家は旗本の代官でありながらも、勤皇の志篤く、王室の式徴を慨嘆し、22世祐福･23世祐之･24世祐良と３代に渡り、後嗣に家督を相続させては上洛し有栖川宮家に仕えた。26世三郎祐伸もまた宮家に奉仕した。

戊辰の役に際して、時の当主三郎祐伸は柏崎の星野藤兵衛と謀り、官軍北越鎮撫使に高田で謁し、兵糧や武器の輸送に日夜尽瘁するかたわら、旗本稲葉穂波を説いて采地へ迎え、官軍に応じさせた。和島地域では各地で激戦が交わされ、久須美邸は60余日に及び会桑軍に占拠された。東軍敗走の折には家具什器略奪され、家屋敷は火をかけられ灰燼に帰した。

有栖川宮熾仁親王殿下御違例の文は、維新後も有栖川宮家に礼を尽くしていたことを物語るものであろう。

Ⅴ．久須美家の人々

久須美家は旗本稲葉家の代官であり、その秩禄はいたって低かったにもかかわらず、稲葉家のため種々用立てをした。財政的に余裕があったとは思われないが、それ故に両家の関係は主従的関係というよりは、寧ろ親族的関係に近いものだったと思われる。主君たる稲葉氏とのこのような関係が幸いして、一族より幕府の要職に就く者を輩出し、天下の情勢を知るに最も便宜の位置に立つことができたのであろう。その結果、維新後も地方にありながら国家的観念を有しての活躍をなしえたといえる。ここでは４人の足跡を略記したい。

久須美太宰裕之　慶応元年（1865）１月９日卒

久須美家23世。学を好み、少壮期江戸で多くの碩学の門をたたく。逸翁と号し、太宰の名は有栖川宮より賜った。「而して、学定師なし。詩を善くし、書法に長ず。遂に暘谷館

を開き、公務の暇生徒を教授す。平生客を好み、多くの文人学士を延きて之を館し、以って講習に資す。柏如亭、亀田鵬斎、市河完斎、大窪詩仏等皆淹留数旬、而して柏如亭最も久しといふ。中歳、時事に感憤し、家を弟記内に譲りて京に上り、有栖川宮に謁し、其の家臣に列される。」（『北越詩話』より）

久須美三郎祐伸

明治９年（1876）２月７日卒

文政５年（1822）２月１日生まれ。少くして江戸にて、経を朝川善庵、詩を大槻磐渓に学ぶ。久須美家26世として、幕末、維新後に活躍。余燼燻る明治２年（1869）に、「越後国民政之管窺愚考」等を新政府に建議する。税の金納、大河津分水の必要性、交通政策、公僕としての役人の振る舞いや民政事情の改良等を訴える。また、同年、石油の利を唱え、その探査を東京の岸田吟香・横浜の中川嘉兵衛と共に願い出、大隈重信の計らいにより、外人技師の紹介を受ける。探査難渋するも、後日に貴重なる資料を残す。府督楠田英世はその才を新政府内で生かすよう、岩倉右府・大隈参議に推挙するも、三郎断り、養蚕技術の普及等地域経済の振興を図る一方、大区長等を務め地方政治に範を示した。

― 久須美三郎之碑（原漢文）―

若宮山の碑

久須美祐伸君墓誌銘

正二位勲一等伯爵　大隈重信題額

君の諱（いみな）は祐伸、通称三郎、霞外と号す。其の先出は曽我祐成の家系に接がる。祐成父の讎（かたき）工藤祐経を斬って、身らも亦死す。其の妻某の氏方を娠もり、上州白井に遁れ来る。分娩し男を生む。久須美祐寛と称す。祐寛九世の子孫祐安、延徳中（1489～1492）に同郡小島谷村に居を移す。十六世祐政亨保中（1716～1736）稲葉左衛門に事（つか）える。稲葉氏幕府麾下（き か）の士にて食邑郡中に在り。祐政邑政を管する。廿一世祐良は実に君を考う也。祐良に三男二女有り。長は祐序といい、次は祐利と日う。君は其の三子也。以て文政五年二月一日に生まれる。幼くして聡敏、書を読み詩を善くす。長じて大志を有し江都に遊ぶ。干（もと）めて朝川善庵に学ぶに従りて業益進む。主家の財計窮蹙（きゅうしゅく）に会う。以て君邑政を管する。而して久須美氏亦不幸にも家道頗る衰え、兄祐序は以て君を嗣と為す。是に於いて兄弟戮力（りくりょく）協議して一意家道を綢繆（ちゅうびゅう）し、漸く復す。当時鄙邑の納租、米穀を多用す。君の建議にて米納に変え、以て金納と為す。一挙に上下利を得る。戊辰の際、慨然勤王を唱え大義を其主に奉ずる。官軍に属し、稲葉氏が以て廃せざるを得たるは君の力也。王師越後府に入り、都督楠田英世は君の為人を大隈参議に言う。因って亦参議の知遇を得る。当時王化未だ遐陬（かすう）に遍ぜず。而して能く人心を知らしむ所に君嚮う。亦効有るに与る。君亦夙に越後石油の利を知り、採掘の議を首倡す。経営未だ成らざると雖も其の創業の功没

すべからず。壬申八月、柏崎県の辟出に応じ、大区長となる。三島全郡の所轄七万石を宰る。治ること県中に聞こゆ。既に県廃し新潟県に合併す。新潟県大区に長を置かず小区に戸長を置く。君戸長となるを将に免れ辞さんとする。偶病を獲家にて卒す。明治九年二月七日也。享年五十有五。村中先塋の次に葬られる。君二男五女有り。男尚幼きを以て兄子祐啓を養い、嗣と為す。亦名望有りと云う。里人久須美作之助、君の徳を慕い此の碑を建てる。銘に曰く　　家を治めて家治まる　邑を治めて邑治まる　唯其れ私を無す　故に能く私を成す　牛刀にて鶏を割く　何ぞ人の嗤うを顧みん　心を尽くして職に奉ずる　観を請い銘辞す

明治四十一年歳在戊申十一月
勅撰議員正四位勲三等文学博士重野安繹撰
中林隆経書　　雲浦　高橋義一刻

※重野安繹（やすつぐ）…「大日本編年史」の編集にあたり実証主義史学を説いた初代史学会会長。異名は抹殺博士。

久須美秀三郎祐啓　昭和３年（1928）１月18日卒

嘉永３年（1850）久須美七左衛門毅堂の長子として生まれる。明治９年（1876）久須美家27世として家督を嗣ぐ。幼少より読書を好み、長岡藩儒士、大瀬虎治、田中春回につき漢学を修め、上京して島田重礼の門に入る。帰郷後、小学校を主宰し、大区長、戸長を歴任する。明治12年（1879）県議会議員となり、明治19年（1886）副議長を務める。明治35年以降衆議院議員に２回当選す。後に勅撰議員の声をかけられるも辞退する。その力を地方の開発に注ぎ、明治15年には山口権三郎等と尼瀬石油組合を組織する。早くから鉄道の重要性を説き、明治20年より北越鉄道（現信越線）の創設に奔走す。北越鉄道開通後は同志と図り越後鉄道の開通に尽力し、大正２年（1913）に白山柏崎間全線営業を開始する。言論に長けた氏は越佐新聞、北越新報の経営にも携わる。また、新潟鉄工所、長岡銀行、日本石油、新潟水力電気等の各社取締役を務めた。山県有朋、勝海舟、大隈重信、渋沢栄一など明治の偉人達とも親交厚きものがあった。「京釜鉄道の発起に際し、渋沢子爵の勧誘により、自分も発起人の一人に加わり、（略）開通式に参列したのを初めとし、（略）聊か朝鮮の鉄道にも微力を致すところがあった。」と中越新報（昭和２年５月９日号）に記事を寄せている。

久須美東馬祐徳　昭和22年（1947）10月22日卒

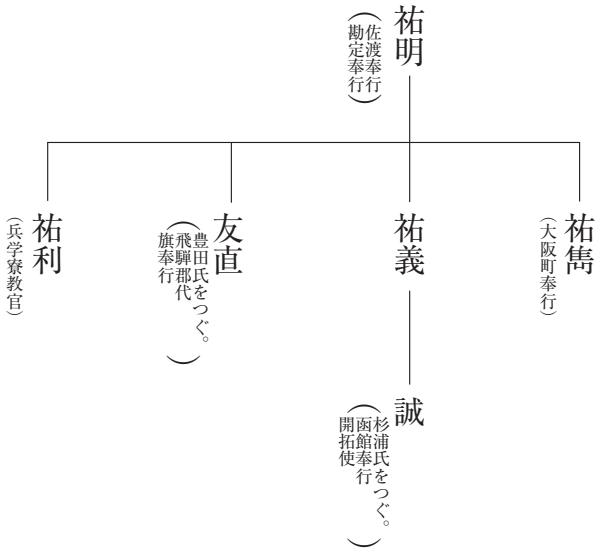
明治10年（1877）11月６日久須美秀三郎の長男として小島谷に生まれる。長じて早稲田大学に学ぶ。病気のため学業中途にし、静養のかたわら恩師田辺新之助に師事。また、日下寛（日下勺水）について学ぶ。健康回復後、父秀三郎と相携えて鉄道開発事業に心血を注ぐ。北越鉄道の国有化と前後して、信濃川西岸線敷設のため、明治40年（1907）発起人会を立ち上げ、大財閥安田善次郎を説き、大正２年（1913）に越後鉄道（現越後線）白山柏崎間の全線開通。大正５年（1916）西吉田－弥彦間の参宮線（現弥彦線）完成。大正14年（1925）西吉田東三条間完成。昭和２年（1927）東三条－越後長沢間完成。同年越後鉄道が国有化されるも、現白新線の国会決議を喜び、長岡鉄道の市内乗り入れを腐心する。

鉄道事業以外にも、広井一を専務とし、新潟新聞や日英醸造の社長を勤め。寺泊銀行の頭取をも務める。また、大竹貫一と北海道拓殖組合を組織しての開発事業も手懸ける。政界にあっては、大正４年と６年に衆議院議員に当選し、鉄道省鉄道運輸委員長を勤める。坂口仁一郎の後継として、憲政会新潟支部長の任に当たる。弥彦公園の造園を陣頭指揮し、５万坪の大公園の完成をみることとなった。私財を投げ打っての公衆的公園の宿願成就である。

Ⅵ．江戸で活躍する人々

８代将軍吉宗の時代、江戸で士官の道を切り拓いたのは18世久須美六郎左衛門祐邦である。小島谷の家督を後嗣に譲り、江戸で御家人となった祐邦は筆算吟味に13回挑み、71歳で勘定奉行配下の勘定吟味役並となった。御役大切に勤めあげて、江戸での久須美家の基礎固めをした。やがて、久須美六郎左衛門祐明が、幕臣として勘定奉行まで上りつめ、江戸でのさらなる強固な土台を築きあげた。一族のそれぞれが、祐明の「身の程を知れ」を家訓として、幕末・維新期を精励した。三河武士でなく、鎌倉武士の流れをくむ久須美一族であったが故の覚悟であったのだろう。

以下２人の足跡の概略をしるしたい。



久須美氏略系

久須美六郎左衛門祐明　嘉永５年（1852）卒

久須美六郎左衛門肖像画

明和８年（1771）、19世久須美六郎左衛門祐光の次男として生まれた。長兄が早世し、本来なら小島谷の地で久須美家を相続すべきところ、江戸で仕官した。

評定所留役から町奉行吟味物調役、寺社奉行吟味物調役を経て、天保11年（1840）に佐渡奉行に登用された。当時、稀代の難事件とされた但馬国出石藩でのお家騒動（仙石騒動）を、川路聖謨とともに解決に導いた。その折のすぐれた公事の手腕をかった時の老中水野忠邦は、二人を佐渡奉行に推挙した。

休憩看板（佐渡市山本家所蔵）

さらに小普請奉行、大坂町奉行を経て、天保15年（1844）には勘定奉行にまで進み、その職を６年間という破格の期間勤め上げた。木村芥舟の『幕府名士列伝』における、「…小吏より起り久しく評定所裁断の職に在て老練明吏の目あり、天保15年大坂町奉行より入て公事方勘定奉行に任ず、人その適任なるを許せり…」だったのである。公事の世界にあっては「久須美の吟味中野の勘

弁」と謳われていた。

80歳にて名誉職の西丸旗奉行となり、嘉永３年（1850）にようやく散官した。佐渡奉行の任からの帰途、郷里小島谷に墓参し、久須美家墓地に石灯籠を遺す。後に、佐渡守を名のる。

久須美家墓地（手前の石灯籠は久須美祐明が墓参の折遺す）

― 久須美六郎左衛門祐明の墓参 ―

天保13年（1842）５月、佐渡奉行の任を果たし、同月11日小木を出港し出雲崎に至る。この交代帰府の途中、郷里小島谷村に墓参す。『佐渡遺事』にその折の模様が以下のように記されている。

『夜に入り久須美七左衛門並に安宅来る。面談明日墓参の儀委細申談、直に退散。

12日、今朝６時頃出雲崎旅宿を出立（羽織袴）供立対鎗を始め武器の類は不残為持行列道中之通り、井伊右京亮領分、同郡久田村より南山寄りへ入込、峠を三つ越え日野浦村、夫より小嶋谷村に至る。

小嶋谷村入口鹿島明神社鳥居前へ七左衛門、安宅等出迎え罷在、夫より下乗して鹿島神社へ参詣、夫より十町余も罷越、七左衛門屋敷見え候処より、行列を備え、静かに七左衛門宅へ罷越、玄関にて下乗、書院へ通り暫らく休息して先ず入湯、掛かり湯を遣い、麻上下に着替え（中略）布衣装束に改め七左衛門案内にて墓所へ罷越、山上御先祖方墓処に薄縁敷有之候故、其所にて拝礼尤も兼ねて用意の沈香を以って焼香拝礼、終って、本光寺読経中着座、今日ははからずも自分実曾祖父君涅槃院殿祥さい忌日の儀、別て本望至極（中略）実に感涙を催し候事に候、寛々拝礼相済帰宅（中略）途中見及候へば、御料社領の老若男女子供まで、耕地を隔て道の端又は田の畔、或は家居の前に蹲踞して見物する様子なり。（以下略）』

杉浦（兵庫頭）誠　明治33年（1900）卒

久須美順三郎祐義（久須美六郎左衛門祐明の次男）が旗本小林家の入婿となり、文政９年（1826）母真木との間に男子が生まれた。杉浦誠（幼名正一郎）の誕生である。正一郎が生まれた翌年、父母は離別し、父は久須美家へ戻った。

杉浦誠

正一郎は実母のもとで７歳まで育てられたが、天保３年（1832）10月、実母のもとを離れ、父祐義、祖父祐明の住む久須美家へ引き取られた。天保11年（1840）には実母が亡くなった。父母の離縁、実母の他界と不幸続きの正一郎は、祖母の手で育てられた。天保14年（1843）５月、大坂町奉行として任地に向かう祐明は、子祐義、孫正一郎を同道した。

久須美六郎左衛門祐明は、正一郎父子の不遇に対する思いから、旗本杉浦家の家督相続権を譲り受け、嘉永元年（1848）、正一郎は杉浦誠を名のることとなった。この年杉浦は従姉妹のお喜多と結婚したものの、無役の小普請のうえ、義父（杉浦求馬）への仕送りも必要とするので、生計のため妻の実家、叔父豊田友直の家に寄宿した。

旗本杉浦誠は嘉永４年（1851）12月に大番衛士となった。鉄砲玉奉行を経て、文久２年（1862）５月には蕃書調所（翌年には開成所となる）頭取に任命された。13代将軍家茂に拝謁し、進講した。この折の杉浦の歯に衣を着せぬ言葉が将軍と同席した幕閣の心を打ち、３ヶ月後には目付に登用された。幕府の土台を揺るがす激動期に、幕府の中枢部に入った。

目付杉浦誠は老中板倉勝静の信任が厚かった。将軍上洛問題では政治総裁松平春嶽の片腕として奔走した。また、水戸天狗党の暴動解決に腐心した。だが、元治元年（1864）攘夷論者松平直克による政変は穏健派一掃となり、老中、若年寄９名が罷免要求された。その一人杉浦誠もこの年の６月から非職となった。

慶応２年（1866）、ロシアとの領土問題で苦慮していた幕府は、再び杉浦誠を箱館奉行に補した。時代は開明的で冷静沈着な能吏を必要としていた。慶応４年（1868）、新政府誕生後も杉浦は箱館にとどまって人心収攬につとめた。空白をつくらず新政府との事務引継ぎを果たし、希望者には引き続き仕官できるよう心を配った。

箱館を引き払った杉浦誠は、駿府藩の公議人となったものの、やがて外務省への出仕を命ぜられた。開拓使権判官として再び箱館の地を踏み、明治10年（1878）までつとめた。

明治９年の天皇行幸の際には、すべて先導を務め、陪食を仰せ付けられる一方、帰京の折には旧幕臣と往復し、徳川家達を訪ねたり、勝海舟と食事をするなどしていた。

退官後の杉浦は、明治11年（1879）に結社「晩翠吟社」を創設し、以後漢詩人杉浦梅潭時代を送ることとなった。時は「和魂漢才」と謳われ、漢詩文盛況の時代であった。

挿　話　～久須美家を巡るエピソード①～

(1) 拝領の御門

西福寺（長岡市渡里町）にある山門（薬医門）はかつて久須美家が拝領した門である。山門には二枚の棟札があり、一枚には文政６年（1823）６月18日に久須美七左衛門祐之と久須美小弥太祐吉が拝領したことが記され、もう一枚には天保10年（1839）に、旧越路町岩塚中沢の山本助三郎喜徳の名が記されている。天保10年の棟札は山本家へ譲渡されたことを示すものである。

久須美家がこの門を誰から拝領したかは棟札に記されていない。また、拝領の御門を何故山本家へ譲渡したのか理由は明確ではない。下賜主や山本家への譲渡の事情については諸説ある。

なお、この山門は第二室戸台風により、倒壊したままになっていたのを、西福寺の住職が文化財保護のため、山本家より購入移築し、現在に至っている。

西福寺（長岡市渡里町）

⑵ 「桝屋」での宿泊

久須美家23世太宰祐之は京師からの帰京の節は長岡の「桝屋」を常宿としていた。宿泊すると、玄関に有栖川宮家の御紋と久須美家の「庵木瓜」の紋の幔幕が張りめぐらされた。その幔幕を見て、長岡藩城主牧野公自ら挨拶に出向かれたといわれている。

⑶ 石油の探査

明治２年（1869）６月27日、箱館の五稜郭開城をもって戊辰戦争は終った。その余燼まだ冷めやらぬその年の11月、越後三島郡の久須美和藤治、横浜の中川嘉兵衛、東京の岸田銀治の三名が新政府民部省にあてて、米国人ハレーを雇っての油田調査を願い出た。刈羽郡妙法寺村での油田踏査は、降雪にわざわいされて成果を得ず、翌年２月に一旦引上げた。この時、次のような願書が提出されていた。

乍恐書付を以奉願上候

昨巳年中私共三人より越後国石脳油一件、願の通御許状頂戴被仰付、右堀立方に付夷人教師相雇、所々湧出の場所迄召連度旨奉願上候処、御聞届被成下、九月中水原県え御達に相成難有仕合に奉存候。依て十月中刈羽郡妙法寺村迄、夷人召連堀立方に取掛、尤此辺村々、柏崎県御管轄に付、巨細申立仕候処、仔細無之旨被申渡、器械等十分取集手配仕候折柄、存外の大雪降積り、彼是遷延仕候内、当正月に至、柏崎県より夷人滞在の儀、一旦聞届遣候得共、民部省の御達にては、不都合の儀も有之候間、今般改て、外務省の許状持参可致、夫迄は当管轄地には難差置趣被申渡、不取敢難渋筋申立候得共、御聞届不相成、無余儀新潟迄引取、狼狽至極罷在候。最早雪消にも相成、堀立に取掛度奉存候間、何共奉恐入候得共、石脳油湧出の場所、夷人滞留無差支様、御許状頂戴被仰付被下置度、此段奉願上候。以上。

午（明治三年）四月

中川屋嘉兵衛
岸田銀治
右両人代兼願人
士族伯耆国
穂波家来
久須美和藤治

民部省租税司御役所

この願書にある久須美和藤治は久須美秀三郎で、当時まだ20歳だった。義父三郎が稲葉家の家臣なので、公然と名を名のるのをはばかり秀三郎の名で提出していたのだった。岸田（画家岸田劉生の父。英和辞典の発刊や新聞の刊行をした。）は眼薬「精錡水」の調剤販売により名をうっていた。また、中川は牛乳の搾乳や製氷に成功していた。岸田と中川は宣教師として来日していた医師J･C･ヘボン（J･C･Hepburn）のもとに維新前から出入りし、文明開化の先駆者として活躍していた。

石油探査の願書を受け取ったのが大隈重信であり、後日久須美秀三郎とこの折のことを懐旧し、二人はおおいに談笑しあっている。

⑷ 久須美家と曽我物語と妙法寺

『曽我物語』は鎌倉幕府の開幕前後、土地を巡る争いから父を殺された曽我十郎･五郎の兄弟が、源頼朝の行った富士の巻き狩りの折、敵の工藤祐経を討つ準軍記物語である。江戸時代には「曽我物」として歌舞伎に浄瑠璃にと喝采を博した戯曲である。また、忠臣蔵等と並ぶ三大仇討ちの一つとされている。

物語の主人公である曽我十郎が久須美家の祖であるが、工藤祐経の末孫をたずねると日昭上人あり、幕末に長崎奉行を勤める人ありである。日昭上人は法華宗（日蓮宗）を開いた僧日蓮の本弟子（六老僧）であり、その筆頭と目される僧である。日昭上人が武将風間信濃守信昭の助力

により、北越布教の根本道場として長岡市村田の地に開基したのが、本山村田妙法寺である。

久須美家の住居であった住雲園は、旧三島郡和島村の東に位置し、村田妙法寺はその西に位置している。共に地域の文化的殿堂として広く光彩を放ち続けてきたのである。

(5) 久須美家の情報ネットワーク

小島谷の久須美家に江戸より早飛脚が来た。久須美三郎は真夜中に届いたこの知らせを布団をはねのけて読み入り、しばらく黙考していた。傍らで寝ていた三郎の長女京子はこの夜のことを鮮明に記憶していた。伝えられたのは水戸浪士の騒動であり、発信者は久須美権兵衛祐雋だった。

久須美一族は文筆にすぐれ、多くの日記や書簡を残している。記録保存されたそれらのものは親族間で交換・回読されていた。昭和の初め「久須美家文書解題」を記した元田修三はそのことを驚嘆している。一族にはある種のネットワークがあり、それは江戸と小島谷の間にも及んでいた。

『久須美父子の遺徳を偲ぶ』に記されている「大塩平八郎の乱」や「黒船渡来と幕府対策」等の詳細の記述は、そのネットワークの存在を雄弁に語ってくれるものであろう。

Ⅶ. 越後鉄道（現越後線）の創設

明治15年(1882) 6月、日本鉄道高崎線が着工され、上野－高崎間は明治17年5月に全通となった。この高崎線の建設は新潟県の鉄道建設の機運を刺激した。官設直江津線(直江津－上田)の一部が明治19年8月に直江津－関山間で開通した。直江津線(明治28年12月より信越線)の工事進捗は、県内での鉄道建設の議論をさらに高めた。明治17年(1884) 3月に、県会議長山口権三郎の呼びかけに応じて集まった政財界人により、県会議事堂内で鉄道敷設会議が開催され、種々の路線提案にこだわらず北越鉄道会社の設立が決められた。

だが議論は、官製か私鉄によるか、経済説と国防説との対立、直江津からの延伸か、上越線、岩越線、豊野線のいずれをとるかで紛糾の繰り返しであった。明治26年(1893)12月の県会で「北越線連成の建議」が可決され、ともかくも直江津からの延伸で新潟・新発田に及ばんとする方向性が打ち出された。明治28年1月に北越鉄道株式会社が発足し、同年12月に鉄道敷設の免許状が交付された。直江津と沼垂を結ぶ北越鉄道が全線開通したのは明治32年(1899) 9月であった。

北越鉄道開設にあたってあった、いくつかの曲折のひとつが、信濃川の東岸か西岸のいずれを通すかであった。結局は東岸となったのであるが、西岸の計画が立ち消えとなったわけではなかった。

明治39年(1906)、北越鉄道株式会社重役久須美秀三郎、渡辺嘉一、支配人朝比奈林之助や久須美東馬等の人々によって、柏崎から信濃川西岸を新潟まで進む海岸線の選定や測量設計が着手された。翌年の1月10日久須美等の主唱により東京市鉄道協会内にて東京市発起人会を開き、仮定款等諸般の協議をし、引き続き新潟市、長岡市、柏崎市等において再三の協議を重ね、1月29日に発起人総代久須美秀三郎名義を以て、仮免許状下付申請書を逓信大臣に提出し、長岡市の北越鉄道株式会社内に仮事務所を設置した。

仮免許状は下付されたものの、時まさに日露戦争後の戦費負担等で財界の意気消沈はなはだしく、本免許の申請を再三延期せねばならなかった。明治43年(1910) 2月17日、久須美東馬は東京市の安田善次郎を訪ね会社設立の儀につき支援を懇請した。3月5日より数日にわたり、

久須美秀三郎は新潟市にて、白勢春三、斎藤喜十郎、桜井市作、鍵富徳次郎等の発起人と会合し会社創立の儀を協議した。さらに４月20日より２週間にわたり、安田善次郎、安田善四郎、久須美東馬三名にて路線並に諸般の関係について精細に踏査した。これをうけて５月15日、久須美秀三郎は新潟市で白勢春三、斎藤喜十郎、桜井市作、鍵富徳次郎等と会社創立の儀を協議した。

５月31日より６月８日に至る間、安田善次郎の信任を受けた元甲州鉄道株式会社専務取締役岩田作兵衛、鉄道院技師関喜平両名が来越し、久須美東馬と共に路線の踏査及び沿道の諸々の関係について細密な調査をし、両氏は安田善次郎に報告書等をあげた。７月４日に安田善次郎は久須美秀三郎、久須美東馬両名（以下「久須美父子」）に、資本金を150万円とし、軽便鉄道に変更すれば経営が見込める旨調査報告書並に設計予算書を廻付してきた。

７月10日、久須美父子は新潟市において白勢春三、斎藤喜十郎、桜井市作、鍵富徳次郎等と会合協議し、さらに刈羽郡山口達太郎、内藤久寛、西蒲原郡山田平太郎、今井孫市、長岡市渋谷善作、広井一等と協議の結果、安田善次郎の変更提案を飲んだ。安田善次郎は即刻５千株引受を言明し、これにより会社設立の基礎が殆んど確立した。

明治43年７月27日より３日間、萩野左門、久須美東馬は西蒲原郡役所や沿道町村役場にて各町村長や有力者と会合を重ねた。８月５日には刈羽郡、８月９日には三島郡とそれぞれの郡役所にても各町村長や有力者と会合を重ねた。８月10日に創立仮事務所を新潟市上大川前通五番町に移転し、９月20日新潟市において斉藤喜十郎、白勢春三、桜井市作、小出喜七郎、久須美父子六名にて協議し、安田善次郎、内藤久寛、今井孫市の３名を加え、創立委員９名を決定した。

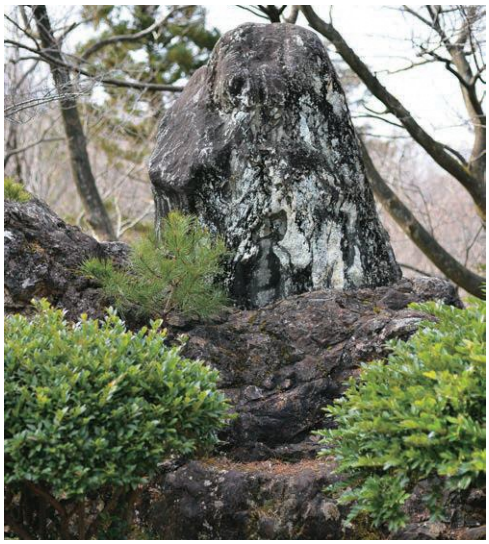
９月22日には新潟市イタリヤ軒にて市内の有力者を招待し、鉄道の沿革を説明し、株式引受の儀を懇談した。そして、９月28日の安田善三郎の来越を機として以後数回にわたる創立委員会を開き、11月10日に株式募集公告を発表した。翌明治44年３月10日に創立総会を開き、役員を選任し、３月11日に会社設立登記を完了した。

― 松霞山碑陰記（原漢文）―

越後鉄道は柏崎従り新潟に達す。岐れて弥彦に至る。百貨輻湊し乗客倍加し以て今日の盛を致すは安田翁の力に居多する。翁善次郎号は松霞と称す。大正五年余は同志と謀り新たに弥彦において園を開かんとす。延袤（えんぼう）五万余歩に泉石樹竹を布置し結構して自然と一如の地となす。三山在り。右は御榊と日い左は御殿と日う。中は独りその名を闕く。山松樹多くして翠霞に染むるが如し。登りて覧れば蒲原の山川歴々として目に余るものあり。素より翁の功を欽（うや）まつてその命名を請う。翁辞して聴かず。余すなわし擬して以て松霞とす。翁笑いて頷く。因って又題字を謁して石に勒（きざ）みこれを山頂に樹てりと云う。

大正８年10月

越後鉄道株式会社社長
久須美秀三郎撰并書
田淵順蔵刻



松霞山碑（弥彦公園）

かくして、大正元年(1912) 8 月26日に白山－西吉田間が開通し、大正 2 年 4 月20日に出雲崎－地蔵堂間が開通するに及んで白山－柏崎間の全線にて営業が開始されることとなった。

Ⅷ. 参宮線（現弥彦線）の創設延伸

⑴ 参宮線(弥彦支線)

西吉田駅(※1)から弥彦に達する弥彦支線は、大正 3 年(1914) 6 月30日付の越後鉄道株式会社の貸借対照表に建設費1,267円が計上されている。この年から工事が開始され、大正 5 年の彌彦神社の御遷座までに完成しようと計画された路線である。

多くの参拝者が訪れる彌彦神社は古くから人々の篤い信仰を集めてきた。だが、明治45年(1912)に門前からの失火により社殿のほとんどが焼失した。県内各地に再建に向けての赤誠一途の動きがあり、それがみのって大正 5 年10月に現在の社殿が姿を現した。

開通したのは大正 5 年10月16日であった。この開通により神社参拝者への便宜がはかられたことはもとより、明治40年から進められてきた大河津分水工事に大きく寄与することになった。分水工事には大量の石材を必要とし、それらは弥彦山から切り出されていた。その運送の便が飛躍的に向上したのである。この支線は参宮線と名付けられた。

⑵ 参宮線(三条線)

西吉田駅から一ノ木戸駅(現東三条駅)に通ずる三条線は大正 7 年(1918) 8 月21日に敷設免許が下付された。弥彦支線の開通直後には一気呵成に三条まで延長すべきとの声もあったが、当時は第一次世界大戦中であり、また、弥彦支線の営業成績も未知数であり、加えて大河津分水の通水による橋梁建設等の進捗を図らねばならなかったので、しばらく機の到来を待たざるをえなかった。因みに信濃川分水路橋梁の運輸営業開始は大正 9 年10月10日であった。

大正 9 年 8 月18日に、西吉田－燕間の第一期工事がようやく起工され、大正11年 4 月20日に開通した。引き続き 5 月22日から燕－一ノ木戸間の工事に着工した。

だが、大河津分水路の工事の遅れのため、中ノ口川、信濃川の架橋の着手が妨げられ、また関東大震災のため一時工事中止を余儀なくされた。三条線の営業開始は大正14年 4 月10日であった。大正14年上半期の株主総会において「中ノ口川、信濃川二橋梁の工事は本工事における最難工事にして監督者の苦心請負人の努力の存するところなり」と建築概要で報告されている。大正14年 6 月14日に開通式が挙行された。一ノ木戸と西吉田間の路線も参宮線と称することとされた。

鉄道唱歌

汽車の窓より西北に
ゆくゆく望む弥彦山
宮は国幣中社にて
参詣男女四時たえず

弥彦にゆくは三条に
おりよと人はおしえたり
吾身は何もいのらねど
いのるは君が御代のため

大和田健樹作詞

⑶ 延伸(下田線)と国有化

大正 9 年上半期の株主総会にはかり、越後鉄道株式会社は資本金を225万円から450万円に増資した。併せて定款の変更(追加)をした。変更内容は三条線の敷設、新潟市白山停車場から新潟港及び信越線新潟停車場に至る区間の敷設だった。

大正11年上半期の株主総会で、一ノ木戸より森町村に至る鉄道敷設の件が報告されている。それによれば、申請日は大正 9 年 9 月27日であり、鉄道大臣よりの認許は大正11年 1 月13日で

ある。そして、大正12年上半期より貸借対照表にその建設費が約１万３千円計上された。一年後の株主総会では、下田線第一期線（一ノ木戸－越後長沢間）の五十嵐川までの間が５分形、橋梁工事は９分形工事進捗と報告された。

大正14年上半期の株主総会において、中越線(※２)、下越線(※３)敷設免許出願並びにそれに伴う社債発行の件が可決されている。また、一ノ木戸－越後長沢間の建設費が25万６千円計上されている。

大正15年上半期の株主総会は出席株主数が例年の２倍超（全株主数の５割超）となった。国有化問題が表面化してきたのである。国有化については「政府は白山新潟間の線路を国の予定線に編入する目的を以て沿道の経済調査及び測量に従事したるを以て滋に新潟市及び沿道市町村の多年熱望したる省線通過、越鉄国有、東西新潟連絡及び鉄道局設置等の諸問題解決に一大曙光を認めたる」旨報告されている。一ノ木戸－越後長沢間の建設費も33万円超となり、西吉田－弥彦間の建設費25万円を超える進捗となっている。

大正15年下半期（昭和元年）の財務諸表から、「一ノ木戸」の駅名が「東三条」となった。翌昭和２年上半期では、東三条－越後長沢間の建設費は累計80万円が計上され、国有化を目前にして工事完成をみるに至り、昭和２年（1927）10月１日に越後鉄道株式会社の有する路線は国鉄に移管されることとなった。移管にともない、白山柏崎間は越後線となり、参宮線は弥彦線となった。

※１西吉田駅…現在の吉田駅は越後鉄道開通当初は吉田駅であったが、柏崎から信越線への接続ができるようになると吉田駅が信越線にあるため西吉田駅と名称変更した。だが、吉田駅が北長野駅となったのを機に、再び吉田駅に変更した。

※２中越線　…燕－黒崎村－関屋駅－港　※３下越線　…両新線（新潟駅－新発田駅）

Ⅸ．弥彦公園

⑴ 造園計画と工事

弥彦公園は大正時代に造られ、その築造にあたっては越後鉄道株式会社の常務取締役だった久須美東馬が陣頭指揮し、私費をも投じながら造られた公園である。

久須美東馬は造園に反対する越後鉄道㈱の役員や株主を説得し、自らも好きな煙草を断ち、役員賞与はすべて公園造りのために注ぎ込んだ。東馬をこのように突き動かしたひとつの要因は自宅の庭園であろう。遠景に弥彦山を借景としたその庭園は住雲園と名付けられた県下有数の名園である。参宮線（西吉田－弥彦）完成により、弥彦山を近景に配した公園をと心が動くのは自然である。また、東馬はこれまでの日本にみられるような封鎖的・個人的な庭園でなく、開放的・公衆的公園として自然と人工の調和をはかった欧米にみられる文化的公園を宿願していた。建物内から眺める庭園ではなく、誰もが外から入園し、憩うことのできる公園である。そして、それは庭園だけで完結するものでなく、広く森林公園的な一環であり、将来的には動物園や植物園、博物館やスポーツ施設などをも包含したものにしたいという理念を抱いていたのである。

このような理念のもとでの公園築造は参宮線利用者に対する間接的割引となり、さらに利用者の増加が見込まれるので、地元にも神社にも、また会社にとっても利益をもたらしてくれるはずであった。東馬の「弥彦中心主義」である。

弥彦公園の工事は参宮線完成後の大正６年から始まった。まずは、駅舎・駅前広場・公園の一体的開発だった。久須美東馬は東京市から造園家・村木金五郎を招き、弥彦に居を整え工事を進めた。大正６年６月30日付の越後鉄道株式会社の貸借対照表に「遊園地」として約１万２千円が計上されている。大正９年12月31日付の貸借対照表の計上額の大幅な増額は、この時点で一応

の外観が造りあげられたものと思われる。

もちろん公園はこのような短期間で竣成するものではない。樹木が伸び、周辺と調和のとれた雅趣が富むには少なくとも５年、10年の期間を要するものである。その間にさらなる修築・改良を加えなければならない。村木金五郎も造園工事が一段落した後も、しばらく弥彦に住んでいた。

弥彦公園

⑵ 弥彦公園存続の危機　――危機をのりこえて――

昭和２年（1927）に越後鉄道は国有化された。しかし、弥彦公園はその対象から外された。しばらくは清算法人越後鉄道株式会社により所有され、駅前住民やその周辺の人々の手により維持されてきた。

昭和18年、弥彦軒より巻警察署に「公園の木が次々と伐採されているから見にきてくれ。」との電話があった。大沢署長は現場を確認し、調査した。新潟市在住のブローカーが弥彦公園を８万円で購入し、切り売りしたのだった。戦争中、立木伐採には知事の許可を必要としていたのであるが、その伐採は無許可であった。大沢署長は直ちに伐採禁止の手続きをとった。さらに調べを進めると、公園はすでに10数人に売却されていた。取りあえず公園を買戻す資金の調達をしなければならなかった。この難局は、彌彦神社参拝の折弥彦軒を常宿としていた燕町（現燕市）の川上平民が救ってくれた。

だが公園全体の譲渡に対してブローカー側はなかなか応じてくれなかった。交渉は暗礁にのり上げ、結局は戦時調停に持ちこまれた。そのための主体として法人格を有する「弥彦神苑済美会」が設立された。ようやく広く篤志家の協力をえて、11万円で買戻しができた。

以後、多くの人々が公園の美化管理に努めてきたが、次第に彌彦神社の管理に依拠するところが多くなった。昭和37年（1962）、彌彦神社に公園を奉納することを申出て了解を取りつけ、「（財）弥彦神苑済美会」は解散した。かくて、彌彦神社外苑としての「弥彦公園」が再スタートすることとなった。

Ⅹ．久須美父子　遺徳顕彰会

昭和22年（1947）、長沢村（現三条市）の目黒昌司は三条市の渡辺常世に働きかけ、久須美秀三郎の慰霊祭を開かんとした。この意に賛同した彌彦神社宮司高橋章允や弥彦村の小林静夫とともに、岡田正平を長とする発起人会を立ち上げた。

発起人会にて慰霊祭は「久須美秀三郎顕彰会」と称することとされ、県下３市４郡40ヶ町村をもって結成された。昭和22年６月18日に弥彦公園松霞山上で顕彰会が挙行された。久須美東馬夫妻も招待され、その席上①弥彦線と小出若松線との連絡②弥彦公園の済美③両新鉄道の促進等が決議された。それぞれの実現に向けるため顕彰会の役員は県知事が会長となり、新潟、三条、柏崎の各市長が副会長に選任された。

会が動き出さんとした矢先のその年の10月、大宮市（現さいたま市）で久須美東馬が亡くなった。

顕彰会記念写真（弥彦公園東馬像の前）

そのため会の動きはしばらく停滞した。やがて「久須美父子遺徳顕彰会」として再開し、秀三郎逝きて30年、東馬没して11年、両翁の遺徳を偲ばんとして建てられたのが小島谷駅前の「久須美秀三郎の胸像」であり、弥彦公園内の「久須美東馬の立像」である。追って昭和34年に発刊されたのが『久須美父子の遺徳を偲ぶ』である。

久須美秀三郎像
（竹石弘三郎作、小島谷駅前）

久須美東馬像
（竹石弘三郎作、弥彦公園）

挿　話　～久須美家を巡るエピソード②～

(1) 久須美邸（住雲園）での園遊会

大正２年(1913) ９月21日に、越後鉄道の完成を祝う園遊会が小島谷久須美邸で行われた。

「午前11時新潟芸妓の踊りから始まった。爆竹が響く、洋楽が鳴る、来賓一同余興場に集まる。新潟追分とおけさ節踊りが記者には興味深かった。当日の紅裙40余名という。安藤知事が観客席にあって、当日の紅裙連の立見するを傍に呼んで両側に腰かけしめ、美人の中央に侍ったなどは主客打寛いだ愛嬌ぶりが嬉しかった。久須美若君(東馬)一寸色合いの異なった山高帽を冠って、令婦人令嬢を特に一番前の椅子に勧めていたのが目を引いた。12時半に踊りもおわり園遊会に移った。(略)その他の面々、前後にして丘上に設けられただんご店より喰い始め、おでん、日本酒、ビール、すしと、北越の前川君、木下君に落ち合う。高鳥町長も来る。久須美主人の挨拶がある。知事の来賓総代の謝辞、萩野左門の発声にて久須美家の万歳唱和、仕掛花火が爆発する。久須美若君の挨拶がある。(略)活発なる美人の手踊りが始まる。２時半というのにはや折詰を片手、停車場へ駆けつけようと席を立つ。３時10分に汽車がきた。佐野代議士が一番しんがりに乗る。

久須美氏一家の催しで能くあれだけ県下の名士が集まったこと、之れ取も直さず久須美父子が座食なお余りあるの資産を有しながら、殆ど同家にとって乾坤一擲に等しき事業を企てて、全力を公共の事業に捧げられた事の賜物ではあるまいか。」と出席した中越新報の記者は報じている。

(2) 鉄道唱歌（越鉄唱歌）

完成当時、越後鉄道は日本三大私鉄の一つとされていた。東京高商(現一橋大学)を卒業した田村文吉は広井一の紹介で越後鉄道㈱に入社した。この唱歌は若き日の田村文吉が物したものである。

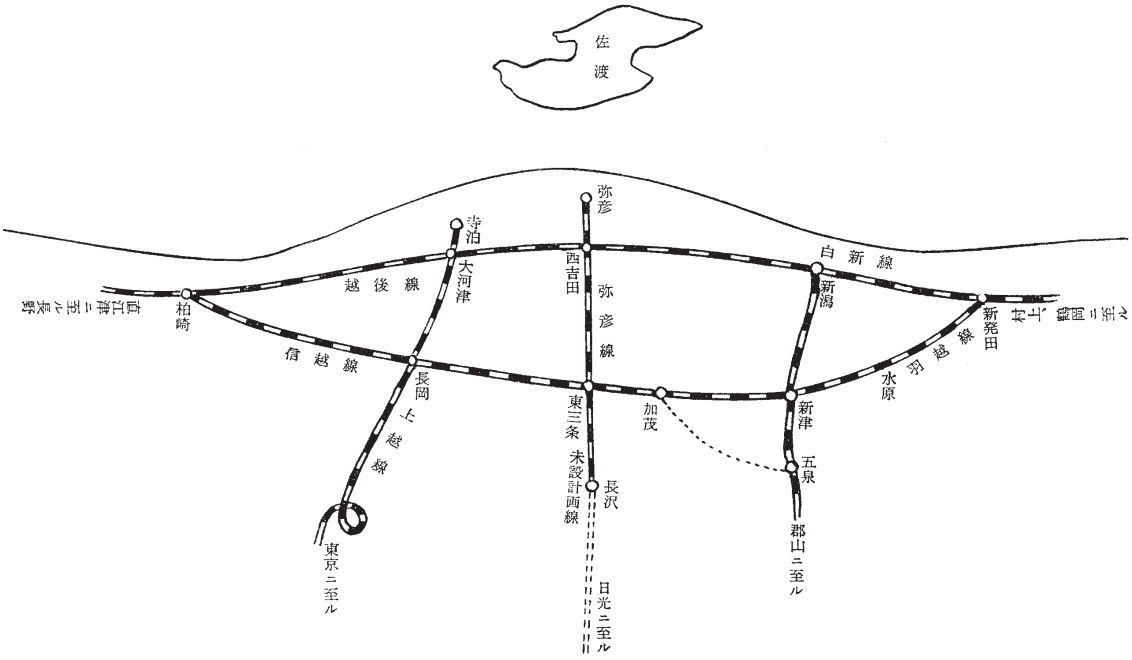
○汽笛一声白山を　はや我汽車は離れたり
柳の糸に　風かをる　船江の里を後にして
○左手(ゆんで)に近き信濃川
往(ゆ)き来の舟の影繁(しげ)く
数ふる遑(いとま)波の上　有明浦は
右手(めて)ぞかし
(略)
○和納過ぐれば西吉田　仰げば高し弥彦の　峰は雲間に
聳(そび)えたち　御手洗川の水清し
○麓に祀(まつ)る御社(みやしろ)は　弥彦神社の名も
しろく　神徳四方に輝きて　参詣絶ゆる時もなし
(略)
○地蔵堂越ゆる程もなく　信濃川の分水路
一千余万を費やせる　北陸一の大工事
○波静かなる寺泊　呼べば応うる佐渡ヶ島
順徳院の御事(おんこと)を　偲びまつるも
畏(かし)こしや
○与板の駅(現小島谷駅)を過ぎ行けば
右手(めて)に高き大伽藍(がらん)
これぞ村田の妙法寺僧日昭の開基とかや
(略)
○長嶺　鎌田　後谷　西山油田の名もしろく
樹(た)てる井楯(やぐら)の数知れず
越後の富を誇るなり
○桃林三里のながめよく　刈羽　荒浜打ち過ぎて
比角越ゆれば我汽車は　柏崎へと急ぐなり
(略)

田村文吉

(3) 毛越鉄道（上越線）の計画

久須美父子の鉄道事業計画のひとつに、北越鉄道(現信越線)の敷設計画と前後して、現在の上越線の構想があった。そのために、部分的ながらも調査を実施し、トンネル掘削まではケーブ

久須美父子構想鉄路（大正７年）　〔⋯⋯ 昭和34年未実現路線〕



ルカーによる峠越えを着想したりした。久須美秀三郎が北越鉄道で経済説を打ち上げ、会議が沸騰し、決裂したのも毛越線の想定を一方に有していたからであろう。

(4) 語り継がれる久須美家

①「小島谷おけさ」に唄われる久須美家

小島谷の人々が「小島谷おけさ」を踊り始めるのは久須美家の前庭だった。そこでしばらく踊り、屋敷内で酒等の振る舞いを受けた後、若宮山に酒や餅を持ち運び踊り明かした。小島谷おけさの一節に「小島谷名物数々ござる…下の方では久須美の庭よ」「今ものこるよ住雲園弥彦の山も庭石よ」等と唄われている。

②子弟教育

久須美家は代々質実好学の家風を亨け継いだ。23世久須美家太宰祐之は代官職の傍ら、塾を開き、近郷の子弟の教育に勤めた。祐之自身特定の師につくことはなかったものの、江戸で諸碩学をたずね、詩文･書法を修め、海外事情にも明るかったという。

暘谷館の扁額(住雲園)

また、江戸四大詩家と称された柏如亭、市河寛斎、大窪詩仏や亀田鵬斎等を小島谷の地に招聘した。淹留を請い、教鞭を執ってもらうこともあった。この私塾は亀田鵬斎により「暘谷館」と名づけられた。

暘谷館での教育の特色は天下の情勢をも語ることが多かったことである。後に「西軽塾」を開いた遠藤軍平も一時期塾頭を勤めた。

今に残る「暘谷館」の扁額は日下部鳴鶴の書である。

③島田小学校の建設（旧長岡市立島田小学校）

昭和４年(1929)にはさしもの久須美家も家運傾き、畳一枚の果てまで差し押さえられる状況

に陥った。だが、３年前に約した運動場の建設費三千円の寄付は反故にできないとして、苦心の末、その約束を守ったことは今なお人口に膾炙している。

島田小学校（旧長岡市立島田小学校）（現和島トゥ・ル・モンド）

(5) 住雲園を守る人々

旧和島村では年々予算化して住雲園と建物の管理をしてきたが、平成16年には地元の住民有志が「越後鉄道の歴史を考え住雲園を守る会」を設立し、計画的に維持管理をしながら、活発な整備活動を続けている。また、春秋２回、地元北辰中学校の生徒や有志による庭園整備も行われている。

なお、小島谷の「久須美父子顕彰会」では、久須美秀三郎の胸像や久須美三郎の顕彰碑の周辺整備をしている。

Ⅺ. 交惇のあった人々

広井　一

広井一

大正９年（1920）７月４日に、久須美秀三郎、広井一の二人は正副社長として、長岡で北越新報の40周年祝賀会を開き、７月10日には東京でも祝典を催した。長岡では太田知事をはじめとして県内の政財界の名だたる諸氏を招き、東京では越後出身の活躍者他、大隈重信老侯、加藤高明、安田善次郎等多数の政財界の招待者をもって祝宴をはった。その席上、広井副社長が謝辞を述べた。

まずは時代を開き越佐毎日新聞を創業し、それを主筆をつとめていた広井に譲ってくれた大橋佐平に謝意を示した。次に社長である久須美秀三郎に話は及んだ。

明治22年（1899）２月に発布された憲法及び議員選挙法等による国会議員選挙のため、早くから政治への関心が強かった広井は川上淳一郎等と、古志・三島両郡の候補者選びに奔走した。ようやく、三島億二郎と久須美秀三郎で支持者間の推挙を一本化する。だが、三島は固辞し、久須美もまた逡巡した。無理推しに推して久須美と波多野伝三郎を改進党系候補として擁立した。すでに自由党系では小林雄七郎と長谷川泰を候補者として活発な運動を展開していた。明治23年（1890）７月１日の開票結果は久須美と波多野の落選だった。

折りも折り、越佐新聞は廃刊の危機に陥り、広井と川上は恐る恐る久須美秀三郎を小島谷の地に訪ね、新聞経営の支援を請うた。久須美は選挙結果に少しも落胆の色なく、「選挙の勝負は一時の事。新聞紙の努力は偉大にして永久的なもの。」と言って、応援はもとより他の有力者へ

の働きかけも含めて約束し、両名を激励した。これにより経営の命脈が保たれ、やがて今日の発展への道を歩むことができたと満座の中で表白した。

この選挙と新聞経営をきっかけに、広井一と久須美秀三郎の関わりは深まっていった。秀三郎が国会議員に立候補する時の選挙参謀はいつも広井がつとめた。長岡銀行設立に際しては、新聞業の傍ら広井は設立事務を取り計らい、やがてその経営に携わった。

この後も、与板町（現長岡市）の大坂屋三輪家経営の与板屋呉服店を救済した時は、秀三郎と広井とが協力し、衰運に傾く新潟新聞の再興では久須美東馬と広井が上京し、加藤高明の意を亨けた坂口仁一郎、内藤久寛、市島春城とで相談の結果新たな展開を遂げたように、その子東馬とも親交を深めていった。

大正11年、新潟新聞の社長だった東馬が日英醸造（株）の社長も兼ねることとなった際には、広井は北越新報の副社長を務めながら日英醸造の取締役となった。だが、新潟新聞の事務も等閑に出来ないため、結局は日英醸造を辞めた。そして大正15年（1926）６月には久須美秀三郎の後任として北越新報社長となった。以後、両社に兼務しながら、新聞事業に心血を注ぐこととなった。

この間、北越鉄道の創業についても奔走し、また越後鉄道の創設に牢固たる覚悟をもっていた秀三郎が、その腰を上げることとなったのは、大阪での花屋旅館で広井と数日間宿していた時の語らいがスタートだった。

渋沢　栄一

日本の資本主義の父、渋沢栄一が県内の実業家と関わりを深めるようになったのは、北越鉄道（現信越線）の創設発起人になることを引き受けてからであろう。

明治20年（1887）前後の、直江津から新潟まで官線を延長しようという計画はいったん頓挫をきたした。だが、時運の推移や北越の文明化と公益性を考える山口権三郎・久須美秀三郎・本間新作の諸氏が奮って私設の道を企画し、鉄道を新潟直江津間に敷設せんとした。明治28年、北越鉄道株式会社が組織され、渋沢栄一は監査役に選任された。だが、創立当初の北越鉄道にはさなざまな紛擾があり、その最たるものが新潟鉄道爆破事件である。

北越鉄道内にあった様々な対立が氷解したのは、明治33年だった。その年本社を東京から長岡に移し、ようやく株主の心が一本化した。久須美秀三郎はこの年に監査役に推された。これ以降久須美は３年後に取締役になり、明治40年からは専務取締役となり、取締役会長の渡辺嘉一とともに会社経営を任い、国有鉄道移管の日までつとめた。この間、渋沢栄一は明治38年に監査役を退き、明治40年まで相談役となり、久須美、渡辺の体制を支援した。

渋沢栄一の日記や書簡では「久住秀三郎」となっているのが、久須美秀三郎である。日記では大概「来る」「来会」「共に」「談久」と事務的に語られている。だが、書簡の中には「何分拙生出張仕兼候間、例之如く久須美氏へ相願候得共、…」と言ったような、渋沢・久須美両者の信頼厚き関係を伺わせる記述が残る。それというのも、渋沢栄一の講話集『論語と算盤』と久須美秀三郎の「時弊論」にはその哲学において気脈相通ずるものを感得しうるから当然と言えば当然と言える。

勝　海舟

久須美家と勝海舟の交りは、勝が幕府の軍艦奉行をつとめていた時代に始まる。

久須美六郎左衛門祐明の孫、杉浦正一郎（誠）は、文久二年（1862）目付（外国掛）となり、将軍上洛の随行員となった。翌年、杉浦は松平春嶽の先発上京に随って、１月22日に順動丸(※)に乗り

込んだ。この艦の指揮をとったのが軍艦奉行並勝海舟だった。また勝の門下生だった坂本龍馬も乗艦しており、杉浦の『経年紀畧』に「順動丸艦中ニ於テ坂本龍馬ニ初テ逢、歓話ヲ尽ス」とある。一週間に渡り乗艦している艦内で『海舟日記』でも「観察杉浦正一郎…」と記されているので、勝海舟と杉浦が何かと話し合ったことは充分に想像できる。

順動丸のシャフト（長岡市教育委員会 科学博物館：提供）

時代が移り明治となり、新政府の開拓使となった杉浦であったが、帰京すると勝海舟を訪れ歓談をし、食事を共にしていた。また、杉浦が漢詩人杉浦梅潭として「晩翠吟社」に打ち込んでいた時代には、漢詩にても勝海舟と相通じていた。

このような東京での久須美一族とのつながりから、久須美秀三郎も勝の下に出入りできたのであろう。久須美秀三郎、東馬父子の選挙参謀をつとめていた広井一が、憧れの勝海舟に会いたい旨の希望を秀三郎が叶えてやり、他日には広井と波多野伝三郎、秀三郎とで勝海舟を訪ねたりしている。

※幕府艦船「順動丸」は、戊辰戦争の折寺泊沖にて爆裂した。

山口　権三郎

「明治29年２月20日、新潟市で北越鉄道会社の臨時株主総会が開かれたとき、たまたま、この総会に出席した大塚益郎、久須美秀三郎、渋谷初次郎、渋谷善作の４人の間に…（略）…もう一つ長岡に銀行を設立する必要があるとの意見がだされ、改めて３月10日の長岡における日本石油会社の臨時株主総会を機に熟議することを申し合わせ、同総会が終わった翌11日、市内の敦賀屋に山口権三郎、久須美秀三郎、大塚益郎、渋谷善作らが集まって…（略）…長岡銀行を設立することなどの大綱について意見の一致をみた。」と、銀行設立の揺籃期が『北越銀行小史』に記述されている。当時の実業家の息吹が伝わってくるが、刈羽郡横沢村（現長岡市小国）の山口権三郎や久須美秀三郎は上記三社の立上げの主唱者となり、明治という時代が必要としていた文明の利をあまねく地方にも及ぼそうとしていたのである。

後年、「信に信頼にたるのは久須美秀三郎と本間信作だった」と山口権三郎は語っている。明治12年に県議会が開設され、議席を共にするところから二人の往来は始まった。そして明治35年、信濃川での水力発電事業の完工目前に山口権三郎が亡くなるまで、二人は政治を語り、事業を談じ、趣味や旅行を共にし、厚い交際を続けたのであった。たまたま山口権三郎が主唱し、明治21年頃の殖産協会やその同好会が立ち上げられた。それは自由党系の人々がその活動を過激化するに及びそれに対抗せんとして、穏健派の坂口、市島、内藤や久須美秀三郎が後押ししたものであった。その会を核として、二人は多くの政治家や実業家を糾合し、地方にあって時代を牽引した。

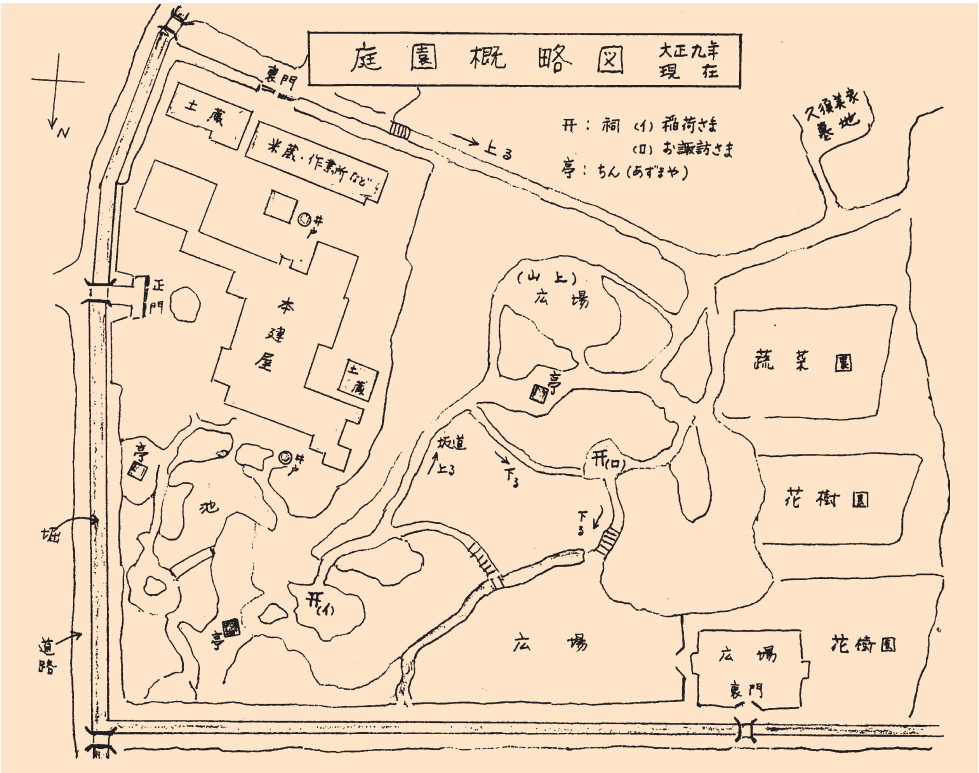
山口権三郎

天保９年（1838）生まれの山口権三郎より12歳年下の久須美秀三郎は当然のごとく兄事しながらも、たがいに忌憚なく語らいながら交流を続けたのであろう。

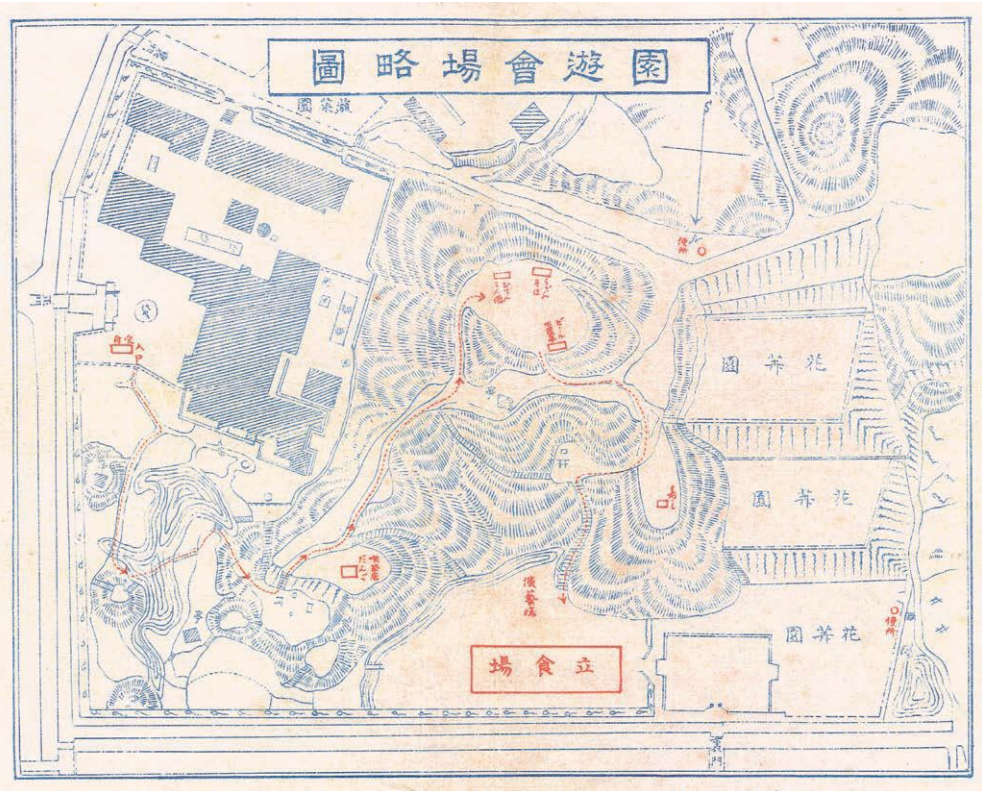
坂口　父子

久須美秀三郎・東馬父子と坂口仁一郎・献吉(※)父子は二代にわたり親密な交際があった。坂口仁一郎は名著『北越詩話』で久須美父子を「父子継美」と述べている。また、東馬は加藤高明に坂口仁一郎を内務参与官に推挽した。献吉は東馬の経営する会社の社員としてその関係は公私にわたる。昭和22年に献吉上京の途次、ふと思い立って大宮駅に下車し、令嗣康馬の鉄道官舎を訪れた。その日、東馬が脳溢血で亡くなり、霊前に額ずくこととなったのもその縁の深さからであろう。

※坂口仁一郎…憲政会新潟県支部長 ／ 献吉…ラジオ新潟社長

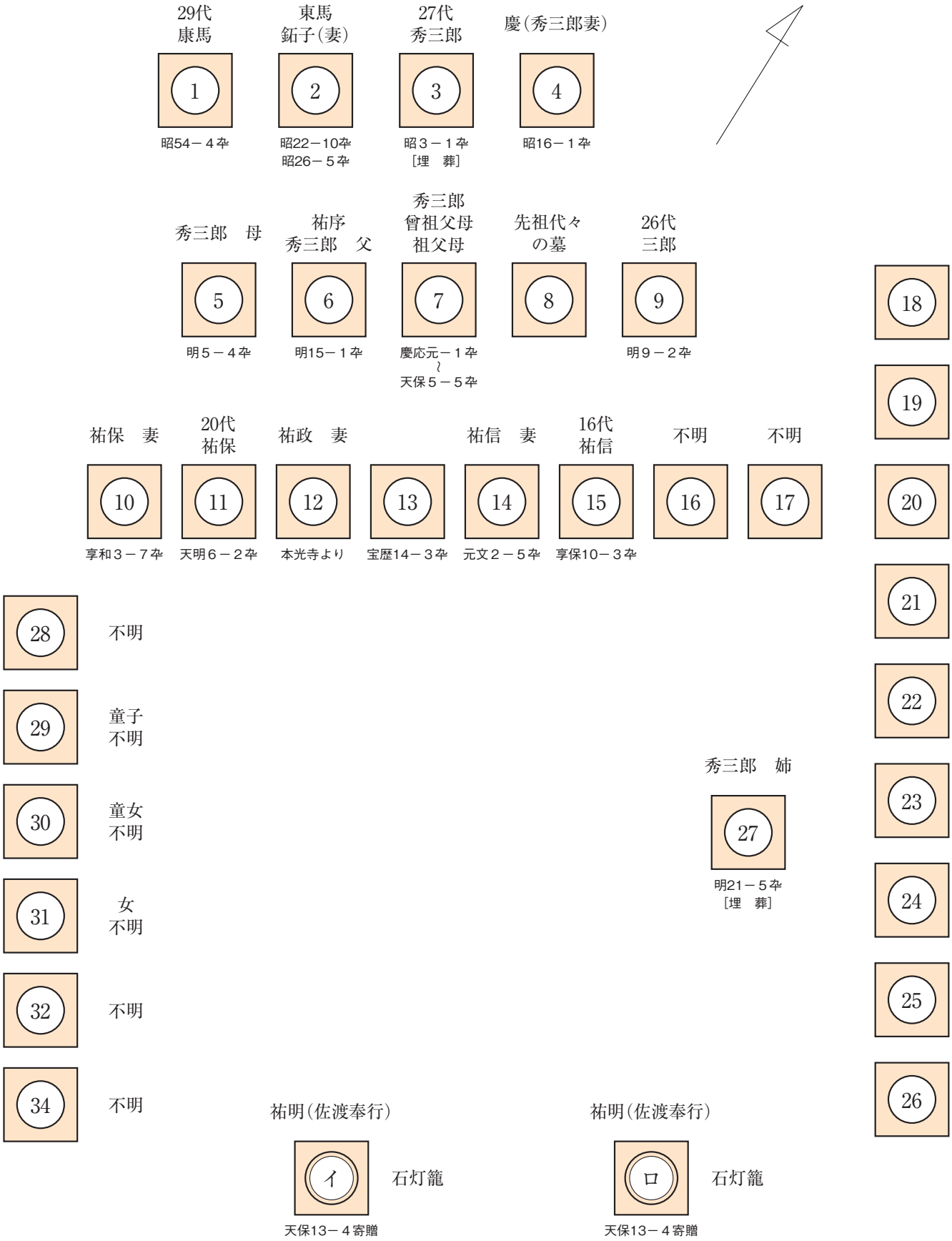


庭園概略図



園遊会会場図

久須美家　墓地



参考文献／１．「久須美親子の遺徳を偲ぶ」久須美親子遺徳顕彰会　／　２．「最後の函館奉行の日記」（新潮選書）　／
３．「和島村史」　他

久須美家家紋（庵木瓜）

住雲園と
久須美家の人々

曽我物語・勘定奉行・越後鉄道

発　　行：和島の宝地域づくりネットワーク会議
お問合せ：長岡市和島支所地域振興課
〒949-4511　新潟県長岡市小島谷3434－4
☎（0258）74－3112
2020年３月改定

地域の宝
Treasure of the region